

図書館報

— Seinan Toshokan pou —

2023.
October
No.195



世界の図書館

1 制作の周辺(2) —かわばたりゅうし—
図書館長 黒木 重雄

2 研究ノートから
「エフェクチュエーション」
商学部 経営学科 教授 吉野 直人

ブラウジングルーム

「見て見ぬふりする日本人と田舎でくつろく英国人
～国民性をめくって～」
外国語学部 外国語学科 教授 金子 幸男

3-4 世界の図書館
メルボルン大学 ベイルー図書館
ビクトリア州立図書館
メルボルン市立図書館
図書情報課 坂本 里栄

5-6 図書館から学修支援を考える
図書館の教育力とは
—学生団体立ち上げから見えた、新たな学修支援のかたち—
図書情報課 篠崎 結衣・齋藤 珠緒

7 蔵書ギャラリー no.35

『神学特別講義』(Relectiones Theologicae)
法学部 法律学科
准教授 中野 万葉子

制作の周辺(2)

—かわばたりゅうし—

図書館長 黒木 重雄

「えーっ、この絵のどこがいいの？」
「草花が描かれているだけじゃないの？」
「えっ、野菜？」
「ちぎれてるの？」
「吹き飛ばされてるの？」
「はあ、いったい何の絵？」
「『爆弾散華』？」
「あー、戦争の絵」



『爆弾散華』川端龍子
1945年 紙本彩色 249.0cm×188.0cm 大田区立龍子記念館

まんまと龍子の仕掛けた罠に嵌ってしまった。ぱっと見とその実が異なる絵は珍しくないが、この鮮やかさは群を抜いている。画面にヒントをちりばめておいて題名で謎を解く。巧妙に仕組まれているが、この作品には、これっぽっちも無理がない。それもそのはず、ただ単に、そこにあった事実を描いただけからだ。1945年8月13日、龍子の住む新井宿一帯が空襲にあった。龍子は無事だったが使用人は死んだ。自邸も壊滅的な被害を受けた。残されたのは、爆風で一瞬にして引きちぎられ吹き飛ばされた庭の野菜たち。龍子は、ただそれを描いた。川端龍子(かわばたりゅうし)作『爆弾散華(ばくだんさんげ)』。世の中に戦争の絵は数多あるが、人も屍も銃も火も焼け跡も一切用いずに、その悲惨さを表した絵を私はこれの他に知らない。しかも、よりによって主役は野菜。まさか野菜にそんな役どころがこなせるなんて誰も思わない。100人中100人が見過ごす機微を、龍子は上手に掬い取って画面に定着させてみせた。ここが重要。絵になるのかならないのかの判断のラインは、絵描きによって異なる。一時も立ち止まること無く、常に攻めの

絵を繰り出してきた龍子だったからこそ“吹き飛ばされた野菜は絵になる(かも)”と思いがぶることができた。並みの絵描きは及ばない。優れた技術はそれなりの努力で手に入るが、優れた眼差しは挑戦し続けることでしか手に入らない。『爆弾散華』は、長年にわたる龍子の挑戦の結晶だ。

実物を見たくて大田区立龍子記念館に来た。ここに来るのは2度目。前回はふらりと立ち寄っただけ。もしかすると、その時もそれは展示してあったのかもしれないが覚えていない。きっと、草花の絵だと思って気にも留めなかったのだろう。今回は、その『爆弾散華』を見に来た。展示室に入って2点目にそれはあった。正直、既に何度も図版を見ているので新鮮さは感じなかった。構成も配色も必要十分。龍子らしい疾走するような筆使いも抑え気味。これと言って特徴の無い絵だと改めて思った。どの角度から見ても絵の“上手さ”や“面白さ”に引っかからない。いや、あえて引っかからないように細心の注意を払って描かれている。きっとそんなものに邪魔されることなく、野菜が爆風によって吹き飛ばされる状況、そこだけにフォーカスしたかったのだろう。絵画でありながら絵画的な魅力に頼らず着想の魅力で成立させた絵。つまり、絵画の価値を画面の外に持ち出したのだ。これまでに絵画における冒険を幾つも見てきたが、これはまさしく静かな大冒険。絵画の価値の所在を拡げた逸品。

龍子が『爆弾散華』を描いたのは60歳の時、画集をめくると、その後のページにも大作がずらり。龍に仏に裸婦に機関車、カワウソに子供に河童に刀鍛冶、渦潮に雑居ビルに筏流しに孫悟空などなど。横幅7mを超える巨大な作品もごろごろ。年代順には並んでいないのかと思い、制作年を確かめてみると1946、1947、1948……。なんと、これら全て60歳を超えてからの作品群。絵描き60ともなれば、おおかたが自分のスタイルを確立し冒険からは遠ざかり、作品は小ちんまりとし円熟味などという雑味を帯びてくる頃。だが、龍子には微塵も当てはまらない。旺盛な冒険心と制作意欲、そしてそれは死ぬ間際まで続く。証に、没年80歳の時に描いたのは、縦2.5m×横4.9mの富士を背にしたサボテン。ホントに凄い、凄すぎる。

ちょうど今、私も60。この夏は、行き場の無いデカイ絵がとうとう家から溢れたので、庭を潰して倉庫を建てた。描けば描くほど、場所も時間も無くなる。鳴かず飛ばずの絵描き人生に霽がかかってきた。「ちょっと制作のペースを落とそうかなあ……」おあつらえ向きに、なんだかんだと絵描き以外の仕事に追われる毎日。やる気が、ぐにゃりとひしゃげそうになっていた。そんな時に、この原稿書き。龍子の画業を改めて目の当たりにした。比ぶべくもなく自分は甘い、甘すぎる。龍子が言い残した言葉がある。「絵の描けない絵描きは死んだ方がよい」戒めにしよう。

「エフェクチュエーション」

商学部 経営学科 教授 吉野 直人

今、私の研究分野である経営学において、「エフェクチュエーション (effectuation)」という言葉が注目されています。英語のeffectuateには、「(事を)引き起こす、(目的・希望などを)実現する」といった意味がありますが、バージニア大学ダーデン経営大学院教授のサラス・サラスパシーは、優れた起業家の意思決定プロセスを表現するのにこの言葉を用いました。

私たちの物事の決め方としてすぐに思いつくのは、最初に目的を明確にして、次に目的を達成する手段を考えて、最後にそこからベターな手段を選ぶ方法で、こうした意思決定の仕方は「コーゼーション (causation)」と呼ばれます。しかしサラスパシーは、優れた起業家はむしろ逆の発想で意思決定していることを発見しました。つまり、今ある手段を所与として行動を開始し、動きながら目的を創り出す、という意思決定の仕方です。

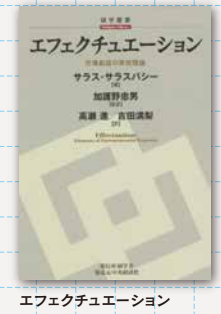
例えば、レゴブロックでの遊びを考えてみましょう。レゴには組み立て説明書がついていて、そこには完成形(目的)とそれに至る手順(手段)が示されています。手順のとおりレゴを組み立てていくプロセスがコーザルな意思決定です。一方で、目の前のパーツを使って説明書とは異なるものを自由に作ることもできます。この場合、最初に明確な

完成図があるわけではなく、パーツを組み立てながら完成イメージを鮮明にしていきます。これがエフェクチュエーションな意思決定です。私の子どもがこの遊び方にハマっているのですが、はたから見てみると、彼らが何を作っているかは完成するまでわかりません。パーツを組み立てて適当なモジュールを作り、そこから新しいモジュールをイメージして組みあわせていく。そんなプロセスを何度も繰り返しながら完成を目指します。

みなさんも何か物事を決めるとき、エフェクチュエーションの考え方を参考にしてみてもいかがでしょうか。例えば就職活動では、自分のキャリアの目標を明確にして、そこから逆算して企業や職種を選ぶことが大事だと言われています。こういうコーザルなアプローチでも構わないのですが、実際のところ、自分のやりたいことは就活を進めるプロセスで変わっていくものです。だとすれば、やりたいことを定めるために自己分析をやり続けるのではなく、あいまいなイメージのままでもまずは行動してみてください。その過程で見つかる新しい発見を自分なりに意味づけしていくことで、自分の考えが更新され、机上の分析からは出てこない自己イメージに辿り着けるのではないかと思います。

<参考文献>

Sarasvathy, S. D. (2008), Effectuation: Elements of entrepreneurial expertise, Edward Elgar.
加藤野忠男監訳、高瀬進・吉田満梨訳『エフェクチュエーション—市場創造の実効理—』碩学舎、2015年。[5階 B: 通常書架 335/1/305]



エフェクチュエーション

ブラウジングルーム

見て見ぬふりする日本人と田舎でくつろぐ英国人～国民性をめぐって～ 外国語学部 外国語学科 教授 金子 幸男

2023年の春に英国BBCのドキュメンタリーを契機として世間を唖然とさせ現在進行中のジャニーズ事件は、見て見ぬふりをするという国民性、「日本的なるもの」について考えさせてくれる。BBC、国連人権理事会および第三者委員会の調査報告によると、10代少年の人気アイドルを多数生み出す芸能事務所のトップ、巨大権力を握る故ジャニー喜多川氏が過去約50年にわたり所属の少年たちに厚遇を餌に性的虐待を強制し、この虐待の事実を事務所側は隠蔽してきたという。2004年最高裁で喜多川氏の虐待が認定もされた。しかし、今日までマスメディアも沈黙していたから罪は重いという。ジャニーズ・アイドルなしではTV番組が成立しないは理由にはならないだろう。その犠牲者の数たるや、少なくとも数百人というから驚愕せざるを得ない。病を発症した者もいるという。私が注目したいのは、この「見て見ぬふりする」という行動を、BBCが日本人の国民性と断言した点にある。日本人ならばなるほどと思いたる節がおののあろう。

国民性については18世紀、国民国家形成期にイギリスのシャフツベリー伯、フランスのモンテスキュー、ルソーなどが議論し始めていることは、アントニー・D・スミスが『ナショナリズムの生命力』(高柳先男訳、晶文社)という本の中で述べている。スミスはナショナリズムを専門とする著名なイギリスの社会学者である。彼の著書との出会いは10年ほど前、私が19世紀英国小説・文化における「イギリス的／イングランド的なるもの」(イングリッシュネス)というナショナル・アイデンティティのテーマを追求し始めた際のことだ。上記書物の中でナショナル・アイデンティティの5要素として、 1) 歴史上の領域、または故国 2) 共通の神

話と歴史的記憶 3) 共通の大众的・公的な文化 4) 共通の法的権利と義務 5) 共通の経済をスミスはあげている。特にイングランドの田舎のお屋敷やコテージに関心のあった私には、「故国」(homeland)という言葉が郷土やホーム(家庭、家族)の意味も持ち、イギリス人の国民性である田舎というホームへの愛情をうまく説明してくれる鍵語となっているのが嬉しかった。田舎嗜好は、世界各地に広がる19世紀イギリス帝国においてもイングリッシュな庭園を再現するという試みに現れている。

「イギリス的なるもの」を長年研究しているうちに「日本的なるもの」にも関心を寄せるようになった。そんな中「見て見ぬふり」をする日本人の国民性に関心を持った。この国民性は権力におもねる傾向があり、日々、犠牲者を身近にも生み出し、巨悪につながることもあるという想像力を持ちたい。

アントニー・D・スミス、高柳先男 訳『ナショナリズムの生命力』晶文社、1998年[7階:自動書庫 311/3/24]



『ナショナリズムの生命力』

世界の図書館

[オーストラリア編]

図書情報課 坂本 里栄

オーストラリアのメルボルンを訪問した際に、用務の空き時間を用いて見学した図書館を紹介する。

メルボルンは、オーストラリア大陸の南東部に位置する第二の都市で、ビクトリア州の州都でもある。ヴィクトリアン様式に代表されるイギリス風の建物や路面電車(トラム)が行き交う、美しい街並みだ。英国雑誌のエコノミストのランキングでは、世界一住みやすい都市とも言われており、治安のよい街としても知られている。教育の街ともいわれ、多くの質の高い教育機関が集中し、今回見学したメルボルン大学は、オーストラリアトップ8大学の1つでもある。人口の1/4以上を多国籍市民が占める都市のため、様々なルーツをもつ人々が生活していることが感じ取れる都市だった。



メルボルン大学 ベイルー図書館 University of Melbourne Baillieu Library

University of Melbourne, Parkville VIC 3052 Australia
<https://library.unimelb.edu.au/baillieu>

オーストラリア

メルボルン大学は、6キャンパスで11館の図書館を有し、約250人のスタッフが図書館の業務に従事している。大学図書館全体の蔵書数は、380万冊を超え、東アジアコレクションをはじめとする、複数の特別コレクションも有している。案内をしてくれた図書館員の方によると、2022年には年間153万人の利用者が図書館を訪れ、対面での質問について37,300件以上の対応が行われている。また、利用者が図書館へコンタクトする手段として、非対面の手段にも力を入れ、オンラインチャットで受ける質問は、対面に次いで2番目に多い手段だという。質問に対するファーストリアージにはボットを活用し、訪問時点では、問い合わせ管理のシステムをOneCRM (Salesforce) に移行するプロジェクトが進行しているとのことだった。

新型コロナウイルス感染症流行前と比べ、物理的な資料の貸出、入館者数、問い合わせは減少しているため、今はキャンパスへの復帰に焦点を当てサービスの提供を再開しているようだ。

今回見学を受け入れてくれたベイルー図書館は、大学最大の専門図書館で、芸術、人文科学、社会科学の教育、学習、研究の中心となっている。

新型コロナウイルス感染症の影響で、大学や図書館への入構制限があったが、ベイルー図書館は、キャンパス内で勉強する場所が必要な学生のための安全な学習スペースとして継続して開館していたとのこと。今年はすべてのコース受講生がキャンパスに戻ることを期待しているとのことだった。訪問のときには非常に多くの学生がキャンパスに戻っている印象があった。

訪問対応をしてくれた図書館員の方から、現在取り組んでいる課題として、次のようなことも紹介された。多くの情報提供をいただいたが、紙面の関係し全てを記載することは難しかったため、代表的な事柄を列記する。

- ・図書館スタッフのスキル向上
- ・学生スタッフの活用
- ・電子リソースのコレクション構築
- ・文献管理のサポート
- ・学生の多様なニーズに対応した図書館のスペースの改善
- ・電子リソースのコレクション構築 (参加型学習、iTutes、講義など)
- ・コレクションのメンテナンス

メルボルン大学の図書館は、より質の高い教育と学習のために努力し、利用者のニーズに応えるために積極的に改善を続けていることが課題からも理解できた。



【写真1】 Baillieu Library入口



【写真3】 図書館内に設置された録音スタジオ



【写真4】 学生スタッフの活用

電子リソースの管理を担当していることから、メルボルン大学の電子リソースの管理や提供方法についても興味を持っていた。ベイルー図書館に訪問した際に検索端末を操作してみたり、webサイトを確認してみたところ次のような特徴があった。

OPACは一般に公開されているが、ディスクジャーナルサービスの利用には認証が必要となっている。館内端末でも設定は同じようだった。ゲストアクセスは、図書館のwebサイトに設置された検索窓に、ひっそりと設けられていた。日本では見慣れない設定のため当初は違和感を覚えたが、統計情報収集やオンラインリソースのナビゲーションを考えると、認証を入口で要求するアプローチは効果的なのかもしれない。

また、特筆すべきは、Google検索で書名を検索したときに図書館の蔵書が検索されることだ。Googleとの連携は、仕組みに位置情報を使用しているようで日本では再現できなかったが、オーストラリア滞在中にGoogleで本を検索すると、図1のようにメルボルン大学の所蔵が表示されたのも興味深い。OPAC自体も、検索結果に表示される情報は外部サービスのデータと連携し、さまざまなエンリッチメントが行われ、目次や書評、レコメンド機能などが提供されている点も注目したい。



【図1】 Google検索で蔵書が検索される

1854年にメルボルン公立図書館として設立されたビクトリア州立図書館は、オーストラリアで最も古い公共図書館であり、世界で最初の無料の公共図書館の1つだ。メルボルンの中心部(CBD: Central Business District)の北側に位置し、現在の図書館の建物の中心となっている八角形の建物は、ロンドンの大英博物館とワシントンの米国会議図書館を模倣して設計された。この八角形の建物は、1913年にオープンし、地下1階、地上1階、La trobe reading roomと呼ばれる読書室を含む4層のギャラリーで構成されている。正面から見ると、ギリシャ神殿を思わせる外観だが、館内は歴史を感じる美しい空間と、洗練された近代的な空間の両方が調和した、まさに世界で一番美しいといわれる図書館だった。

図書館のwebサイトのResearch Guidesをみると、図書館に関する様々な記録を見ることができる。

例えば、"StateLibrary Victoria-history"のstaffのタグが付けられた情報を見ると、年報へのナビゲートや、歴史的な話題を知ることができる。2022年の年報を見ると、7月時点では380人のスタッフが働いていて、フルタイム、パートタイム、有期雇用や臨時と様々な立場のスタッフが図書館の運営に携わっていることがわかる。前述のstaffのタグが付けられた情報の一つである"Women's work"には、ビクトリア州の公共サービス従業員リスト(the public service lists)



[図2 Cook, H.N.E. (1883)]
 [Melbourne Public Library] [picture]
<http://handle.slv.vic.gov.au/10381/271904>
 (last accessed on 2023-9-29)



[写真5 ビクトリア州立図書館 正面]
 (2023年2月筆者撮影)



[写真6 La trobe reading room]



[写真7 書見台]



[写真8 The Ideas Quarter]

に初めての女性図書館員として記録されているIsabella Fraser氏が取り上げられている。彼女は1881年生まれで、筆者の生まれる100年前の人物だ。現在のビクトリア州立図書館のイベントルームの名前になっている。

このように、過去から今に至るまでの記録が残り、この図書館がどのようにして現在のような多くのスタッフが働く図書館に成長してきたかを見ることができる。

La trobe reading roomは、有名なドーム状の天井と放射線状に伸びる閲覧机が美しい読書室だ。読書室を見下ろせる4~5階は回廊になっていて、定期的に展示が開催されている。訪問時には展示中のBirds of Americaと人生で2回目の邂逅を果たしたのも印象深い。

机をよく見ると、一部を引き上げると書見台になる作りになっていて、冊子体の大きな医学書とタブレット

端末を見見台に置いて比較しながら勉強している学生がいた。古き良き伝統的な図書館の環境と利用者の使用するデバイスが違和感なく交わる空間だ。

読書室の下の階は、The Quadと呼ばれ、ハチの巣のような中央のハブからつながる機能の異なる4つのスペースがある。写真8は、地域のイベントなどを開催するコミュニケーションスペースだ。近代的な内装で読書室との印象の対比が興味深い。

メルボルン市立図書館 Melbourne City Library

253 Flinders Ln, Melbourne VIC 3000 Australia
<https://www.melbourne.vic.gov.au/community/libraries/Pages/libraries.aspx>

メルボルン市立図書館は、フリンドラストリート駅から数分のカフェやレストランが集まった通りにある。

建物は2階建てで、1階には貸出カウンターがあり、2階には誰もが利用できるピアノが置かれている。入口に立つ厳肅な警備員の姿と対照的に、私が訪れた時は、2階でピアノを弾いている人がおり、図書館内は穏やかなピアノの音で満たされていた。海外に来たと実感させられる瞬間だ。

図書館内をぐりと回ると、雑誌、CDやDVDなどの視聴覚資料が目に入る。英語以外の図書もあり、ヒンディ語、日本語、中国語、韓国語の本が言語ごとに整理されていた。雑誌コーナーにも、同様に、日本語、ベトナム語、ヒンディ語、



[写真9 City Library 入口]



[写真10 書架]



[写真11 2階ホールのピアノ]

中国語、韓国語の雑誌があった。英語学習者用の資料も充実している。オーストラリアの多様性を感じる資料構成だった。

利用者登録をすると自分のスマートフォンやタブレットをwi-fiにつなぐことができるそうだ。資料検索の端末をみると電子ブックも多く所蔵

している。今回訪問はできなかったが、メルボルン市が管轄している他の図書館には、アメリカの公共図書館でも見かけた3Dプリンタや電子工作の機器が使えるメーカースペースも設置されているそうだ。

私の訪問は夕方だったが、中高生ぐらいの利用者から大人まで様々な年齢層の人々が図書館を活用していた。本を読んだり、インターネットで調べ物をしたりする姿があり、図書館は生活の中で自然な一部となっていることを感じた。

注: 写真は、特に断りがない場合は2023年2月筆者撮影

参考文献 University of Melbourne Library. A Year in the University Library 2016. https://library.unimelb.edu.au/_data/assets/pdf_file/0004/2634034/18359-AcaSer-UniLib-Year-in-the-Uni-Library-8pp-A4-Bro11_web.pdf (last accessed on 2023-9-29)
 State Library of Victoria. Research Guides State Library Victoria - history. <https://guides.slv.vic.gov.au/slvhistory> (last accessed on 2023-9-29)
 State Library of Victoria. Annual reports. <https://guides.slv.vic.gov.au/slvhistory/annualreports> (last accessed on 2023-9-29)

図書館から学修支援を考える

図書館の教育力とは

— 学生団体立ち上げから見た、新たな学修支援のかたち —

図書情報課 篠崎 結衣・齋藤 珠緒

図書館の中心的な業務である“学修支援”。その新しい形を見つけ、可能性を広げるべく、2023年度から図書館学生団体が立ち上がりました。団体発足から半年間、準備期間を含めると約1年間、図書館の学修支援とは何なのかを考え、向き合いました。まだ始まったばかりの活動ではありますが、これまでの取り組みを振り返ってみたいと思います。

はじめに。

図書館の学修支援とは。図書館の教育力とは。

図書館を運営する図書情報課は、学術支援部に属しています。図書館で学生・教員の教育・研究に必要なサービスに関する事項を取り扱うことが主たる業務です。とりわけ学生に関する業務に絞って言えば、“学修支援”という言葉でまとめることができると思います。近年、職員が図書館の学修支援について考える中で、“図書館の教育力”という言葉を目にする機会が多くなりました。これは、当時の図書館長が日頃から口にされていた言葉です。図書館が持つ教育力とは何なのか。既存の学修支援がもたらす教育的効果と、これから模索すべき新しい図書館の教育力の形とは。これらの、ひとつの正解があるわけではない問いについて、図書館職員は自問自答をしながら日々の業務に取り組んでいました。

図書館学生団体の立ち上げに向けて、
目指したもの

2017年に現在の図書館に建て替わったタイミングで、図書館にラーニングサポートデスクが開設され、学生スタッフが、学生からの学修相談に応じていました。2023年度から、「自律的な学修」をサポートするためのラーニングサポートセンターが開設され、学生スタッフの管轄は他部署に移管されました。

図書館では、前述した“図書館の教育力”を大切にされていた当時の図書館長の「正課外での学修支援を強化するため、図書館に学生団体をつくらう！」という発言を機に、ラーニングサポートデスクとは違った形で、図書館と学生を繋ぐ存在である学生団体への立ち上げに向けての動きが高まりました。学生自ら主体的に活動する学生団体と協働することができれば、学生を中心とした利用者にとってより良い図書館運営ができるのではないかと考えたのです。“図書館直属の学生団体”として、図書館“で”活動する学生の集まりという要素に加え、職員を含めた図書館“と”一緒に活動してくれる学生を求めました。もちろん、このような立場を背負って活動することは、通常のサークルよりも責任を伴う部分が生じます。できる限り学生のやりたいことを尊重するスタンスですが、学生たちがやりたいことを何でも好きなように、というわけにはいかないことも事実です。ただ、学生側は活動に関して職員のアイデ

アやアドバイスを参考にできることや、図書館と協働することで、やりたいことにチャレンジできる幅が広がります。そして、私たち図書館職員側は、学生たちと日々コミュニケーションをとることで、図書館の運営に学生目線の意見を取り入れたりと、図書館の教育力に繋がる活動を推進したりすることが可能になります。お互いが持つ強みを活かしながら活動ができる学生団体を作ることを目指しました。

学生団体の発足まで

学生団体発足に向け、他大学の調査をしたり、他部署へのヒアリングを行ったりしました。他大学の調査では、実際の活動内容や活動形態を知ることができました。また、他部署へのヒアリングでは、既に本学に存在していた事務局所管の学生団体の立ち上げに関わった職員から、発案から団体発足までの経緯やスケジュールや流れ、メンバーの確保や活動にかかる予算、心構えなど具体的にアドバイスいただき、発足への今後の歩みや課題を明確にすることができました。その後、図書館職員全体で意見を出し合い何度も協議を重ね、企画書が完成し、手続きを進めていきました。

次に、いよいよメンバー集めに向けて動き出しました。図書館の学生団体なので、図書館や本が好きで、それに関わる活動に興味を持ってくれる学生であることは必要な素質です。それに加え、何か新しいことにチャレンジしてみたいという好奇心や主体性を持った学生と一緒に活動したいと考えていました。図書館に学生団体という新しい活動の場ができて、学生たちが様々な経験をすることで、そこが“学びの場”になってくれたら…という願いも込めつつ、図書館側の思いに共感してくれる学生に声を掛けていきました。前述したラーニングサポートスタッフの学部3年生に経緯を話すと、興味を示してくれました。彼らを中心とした初期メンバーで、日々話し合いや準備を進め、公募でメンバーを増やししながら、2023年4月に図書館学生団体LILA(リラ)が発足しました。

発足してからの半年とこれからの活動

1 LILA(冊子)の発行

学生による図書館リーフレット「LILA」をVol.1～3まで発行しました。Vol.1ではLILAについての紹介、Vol.2では「無人島に

行くとしたら、何の本を持っていきますか？」をテーマに、作家や哲学者たちの回答を紹介しています。Vol.3では、発行時期に作家の大江健三郎氏の追悼展示を館内で行っていたことと連携した内容になっています。

2 図書館ツアー

①在生向け

在学生であるLILAの学生が在学生に図書館ツアーをするという新しい試みで、学生の視点から図書館を紹介したり、利用方法のポイントを伝えたりすることができました。来年度は4～5月に新入生向けに開催できるよう、準備を進めています。

②高校生向け(2023夏・秋オープンキャンパス)

数千人が参加する夏のオープンキャンパス、そして秋のオープンキャンパスで、高校生や保護者の方向けに図書館ツアーを行いました。実際に図書館を利用している学生が説明するという一方で、参加者の方も、雰囲気を感じながら、興味津々に話を聞いてくださいました。実施後のアンケートからも、「施設が整っていて、図書館で勉強したいと思った」「勉強のモチベーションが上がった」などの感想が寄せられ、満足度はとても高かったようです。

3 書店での選書ツアー

書店にLILAの学生が足を運び、実際に店頭で並んでいる本を見て、「図書館にあったらいいな」と感じた本を、図書館で購入する選書ツアーを実施しました。現在は、選定した本を図書館内で展示するために、準備を進めています。

4 しおりの作成

LILAのメンバーが描いたオリジナルのイラストでしおりを作成し、館内に置いて配布しています。在学生はもちろん、オープンキャンパスの際にも、多くの方々が手に取っていただきました。毎回すぐになくなってしまふほど、とても好評です。

5 その他

LILAの学生たちは毎週木曜日に集合して、ミーティングを実施しています。イベントに向けての準備だけでなく、学生同士でおすすめの本を紹介したり、テーマに基づいた本と一緒に読んで、感想を出したりするなど、本や図書館に関する意見交換をしています。

6 これからの活動

学内の教員や学外の講師に依頼し、学内の施設でLILA主催の講演会を行うことを検討しています。また、学内の他部署の学生団体とのコラボ企画や他大学図書館の学生団体との交流など、学生同士のつながりを作ることができればと考えています。

振り返りと展望

立ち上げにあたり、図書情報課の職員で学生団体の「目的」について何度も話し合いました。話し合いの場では、様々な意見やキーワードが飛び交いました。それらをまとめると、「図書館に学生目線と学生の活動という新しい風を取り入れ、潜在価値を引き出すためのつながりの一つとなってほしい」また、「学生団体の場が、学生にとっての学びの場となり、学生と図書館が共に成長する居場所の一つとなってほしい」という二つの想いになりました。

その想いを込め、図書館の学生団体の目的を「**図書館に新たな学びの場を作り、図書館の潜在的価値を引き出すため**」とし、そのキーワードとして「**新しい風を取り入れる、つなぐ、学生と図書館が共に成長する、居場所**」と掲げました。もちろんこれは職員が考えた目的であり、今後実際に活動する学生たちによって様々な目標が作られることでしょう。

また、図書館の学生団体は、学生たちによって「LILA(リラ)」と名付けられました。LILAという名前は、学生たちが考えたもので、以下の3つの意味が込められています。

学生団体「LILA(リラ)」の由来

1つ目:LILAという字は「Legere(読む)」、「Imaginari(想像する)」、「Ludere(遊ぶ)」、「Amare(愛する)」というラテン語の頭文字から取っています。これはフランスの小説家スタンダールの墓碑銘「VISSE, SCRISSE, AMO(生きた、書いた、愛した)」を密かにもじったものです。

2つ目:LILAという語自体は、サンスクリット語の लीला で、「神の遊び」という意味があります。また、ボルヘスという作家の言葉にある「この世の全ては一冊の本に帰すべく存在する」から、書物という概念は「神の遊び」と深く結びついていると考え、LILAの由来に含んでいます。

3つ目:「リラ」という音は、ギリシャ神話の詩人オルフェウスが開発したとされ、聖書のダビデ王が弾いたとされる楽器lyra(竖琴)とも通じています。オルフェウスは芸術家の象徴であり、ダビデは多くの詩篇の作者に帰せられており、どちらもそれぞれの文化圏における文芸の象徴のような存在です。

ラテン、インド、ギリシャ、ヘブライといった異なる文化が一つの言葉の中で響き合う。これは図書館の姿そのものであると同時に、これからの世界のあるべき姿をも示してくれているのではないかと考え、LILAと名付けました。

初期メンバーの学生と職員の想いのもと、新たなメンバーを迎え入れ、今では10名の学生が所属しています。今まで活動を行う中で、学生はもちろん職員にとっても初めての取り組みばかりだったため、思い通りに進められないこともありましたが、現在は今後の活動について前向きに考えを巡らせる日々を送っています。

現メンバーの学生と立ち上げに関わった職員は、これから新しいことにチャレンジしようという気持ちや、活動に対する熱量がとても高いです。これからLILAの活動を続け、先輩から後輩へと繋げていく中で、何がきっかけで、どんな想いで、何のために学生団体を発足させたのか。どのような考えのもと「LILA」という名前になったのか。現メンバーと現担当職員の根幹にあるスピリットは、将来LILAに携わる人にも知ってほしいと思うのです。また、LILAの存在を皆さんに知ってもらうことで興味を持っていただき、ぜひ活動を応援してほしいという想いがあり、図書館報のコーナーの中でひとつの形にして残すことになりました。

LILAに所属する学生を中心に、学生たちが図書館と繋がって、図書館で様々なチャレンジができる新たな学びの場が生まれたことは、とても大きな意味があることだと思っています。図書館としても、これから学生と共に活動して成長し、より図書館を活発で、利用者の居場所となれる空間にしていくことができると感じています。今後彼らの活動から生まれるもの、広がる輪が、図書館の教育力を向上させると信じています。

図書館学生団体LILAの今後に、どうぞご期待ください!

『神学特別講義』

(Relectiones Theologicae tredecim partibus per varias sectiones in dvos libros divisae)

[6階R:貴重書庫329/04/33]



【図1】本書の構成



【図2】「国家権力について」



【図3】「インド人について」



【図4】「戦争の法について」

表紙に掲げたのは、15世紀、16世紀の神学者フランシスコ・デ・ビトリア (Francisco de Vitoria, 1483/86-1546) の『神学特別講義 (Relectiones Theologicae)』である。

スペインのブルゴス出身のビトリアは、1506年にドミニコ会に入会し、パリ大学にて学び (1508/09-1522年)、1522年にはパリ大学にて神学博士の学位を取得した。翌1523年には本国に帰り、バリャドリートのサン・グレゴリオ学院で神学を講じた後、サラマンカ大学の神学第一教授となり、以後没するまでこの地で活動した。ビトリアが後世に残した業績として何より重要なのが、今回紹介する『神学特別講義』である。実は、ビトリア自らは1冊の著書も残さなかったとされる。本書もビトリア自らが著作・公刊したのではなく、彼の弟子たちによる筆記またはその手写本をもとにして、彼の死後10年経ってはじめて公刊されたものである。

そもそも「特別講義 (Relectio)」というのは、当時の大学での慣習として、神学の教授が年度の終わりに、その年の大学における正規の「講義 (Lectio)」をもとにして、適当な主題を選んで再び公開の講義として行ったものである。ビトリアは、当時スペインにあっては神学の最高峰と目されていたサラマンカ大学にて神学特別講義を行った。そこでは、とりわけその時代におけるきわめて実践的かつ国際的に意義のある問題が取り上げられた。

『神学特別講義』には、ビトリアが1526年から1546年にかけて行ったすべての特別講義が集められている。本来であれば20の特別講義が行われたはずであるが、1540年頃からは病気により自分では講義を行わなかったとされ、ビトリアの特別講義は15にとどまる。そのうち2つの講義については、これを筆記した原稿が残っていないことから、実際に行われなかったと推定されている。それゆえ、ビトリアの『神学特別講義』は、どの版も13の特別講義から成る。なお、『神学特別講義』の初版は1557年にリヨンにて出版された。1565年にリヨン版の誤りを訂正する形でサラマンカ版が新たに出版され、それ以後の版はリヨン版とサラマンカ版のどちらかをもとにして作られたことから、どちらも重要な版である。

『特別神学講義』の完全な古典版は1765年の第17版にあたるマドリー版が最後であるとされる。

今回紹介する『特別神学講義』はリヨン版の第2版として1586年に出版された。第1部は「教会の権利について」、「国家権力について」、「教会と公会議の権力について」、「インド人について」、「戦争の法について」、「婚姻について」から成る。第2部は「愛の成長について」、「節制について」、「殺人について」、「聖職売買について」、「秘法について」、「理性を用いる能力をもつにいたったものか行わなければならないことについて」から成る【図①】。

ビトリアの生きた時代は、新大陸発見の直後であり、スペインが新大陸に対してもち得る支配権の問題やスペインから渡った植民者と原住民との関係の問題が盛んに議論された。ビトリアが生活したサラマンカのサン・エステバン修道院は、新大陸の発見以来、その地に多くの宣教師を派遣してきた伝統があり、この修道院に寄せられる「新世界」や植民地支配に関する情報に接する機会が多かったことから、ビトリアは「国家権力について」【図②】、「インド人について」【図③】、「戦争の法について」【図④】の3つの特別講義にとりわけ深い感心をもって臨んだ。そこで示された学説は、その後の神学者・法学者たちに多大な影響を与えた。ビトリアはグロチウス (Hugo Grotius, 1583-1645) よりも「国際法の父」とよばれるにふさわしいとの評価もある。

『神学特別講義』はすべての版が稀覯書 (きこうしょ) とされる。版によってはそのもとになった筆記や手写本が異なるため、多少の異文がみられるものの、ビトリアは講義にあたってあらかじめ入念に草案を作成し、それを弟子に筆記させる方法をとったので、異文といってもそれほど甚だしいものではないとされる。筆記や写本は、こんにちでもスペインやバチカンなどの図書館に保管される。

【参考文献】

伊藤不二男『ビトリアの国際法理論』(有斐閣、1965年) [5階 G: 電動集密 290/0/22]
上智大学中性思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成20』(平凡社、2000年) [4階 B: 通常書架 132/0/12-20B]

編集後記

やっと秋の涼しさを感じたかと思えば...急に訪れる寒さに、少しだけ夏の暑さが恋しくなりますね。

この時期、進級・進学・就職に向けて自分を見つめ直す方も多いかもしれません。

図書館には、そんな皆さんに寄り添う本が、空間があります。図書館でふらっと出会った1冊が、また図書館で過ごした時間が、何かのきっかけとなることを願って。

ご来館、心よりお待ちしております。

(T・S)

西南学院大学図書館報 No.195

2023年10月31日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号

Email lib-jm@seinan-gu.ac.jp

<https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/>

図書館報バックナンバーも上記サイトに掲載しています。